市川純氏学位請求論文審査報告書

論文：「メアリ・シェリー作品におけるロマン主義文学の廃墟的光景：男性英雄像の破壊、及び英雄に代わる女性像」

審査員

主査：西山　清　早稲田大学教授　博士（学術）早大

副査：木村晶子　早稲田大学教授

　　桑子利男　早稲田大学教授

　　及川和夫　早稲田大学教授

　　原田　博　山梨大学教授

公開審査日　平成 22 年 6 月 17 日

審査終了日　平成 22 年 6 月 30 日

論文の概要と評価

本論文はイギリス・ロマン派時代に創作活動をおこなったメアリ・シェリーの作品世界の分析を通し、女性を周辺的存在に追いやる男性中心のロマン主義文学に反論を加え、イギリス文学におけるメアリの正当な位置づけをおこなう試みである。

日本におけるメアリ・シェリーはもっぱらゴシック小説の白眉『フランケンシュタイン』によって知られる作家であるが、欧米におけるフェミニズム批評を中心とした 1970 年代の再評価以降、彼女の文学的あるいは文化論的評価が高まりを見せるのに比して、国内での研究は近年の散発的な研究書の出版を除いて依然、低水準にあるといえる。オースティンにせよギャスケル、ブロンテ姉妹など、他の女性作家の日本におけるこれまでの研究がかなりの水準と量を示している状況にかんがみれば、ほぼ『フランケンシュタイン』一辺倒のメアリ・シェリー研究の遅れは等閑視できるものではあるまい。研究の偏向に対して挙げられるひとつの理由に、フェミニズム批評が作家の全人格的で統一的な作品解釈の足枷となり、ありうべきメアリ・シェリー像を歪めているということが考えられる。すなわち、メアリーの作家活動を前期と後期に分割した場合、その作品研究の精度と分量におい

て歴然たる差異があるのは、作品がフェミニズム批評の枠組みに入るか否かの取捨選択に委ねられてきたという事情がある。このことにより、作品世界全体に通底するやもしれないメアリの意図が閑却される事態も生じているのである。「廃墟」という統一的テーマを掲げた市川氏の論文は、まさにこの点を衝くものである。研究自体が未開拓地とさえいえる『パーキン・ウォーベック』や後期の家庭小説まで検証の幅を広げたことは、メアリの総合的解釈を目指す本論文の意気込みを示すものであるが、それに留まらず、女性一般と女性作家を周辺的存在に追いやる男性英雄像を打ち立てたロマン主義文学観を作品解釈において廃墟に導き、女性作家の視点からロマン主義に新生の光を照射することも本論文の重要な論点となっている。以下、第一章より第四章まで、順に論文の概略と評価を述べる。

第一章

本章は 3 節からなり 1 節と 2 節においては『フランケンシュタイン』が、3 節においては『ヴァルパーガ』がそれぞれ扱われる。

『フランケンシュタイン』は副題に「現代のプロメテウス」とあるように、主題自体に包摂される英雄像の現代的意味を問う作品だが、現実にナポレオンという当代の英雄を目撃した世代にとっては重要な意味を持つ主題であり、メアリの夫パーシー・ビッシュ・シェリーや友人のバイロンも同様の主題を扱った作品を書いている。しかし、最大の問題点は、科学の力により無生物に生命を与え人間を造り出した主人公ヴィクター・フランケンシュタインが、人類に火を与えた罰としてコーカサスの岩山でゼウスの罰を受けた古典神話の英雄プロメテウス像と、どのような意味で重なり、また異質な存在となるのかというところにある。市川氏はこの問題をアイスキュロスやヘシオドスのプロメテウス像にまで遡り、また同時代のバイロンの「プロメテウス」とパーシーの『解放されたプロメテウス』、さらにはコールリッジの「老水夫の唄」との比較を通し論考し、メアリにとってのプロメテウス像を提示する時代的意義を論じる。

バイロン、パーシーという同時代の二人の男性詩人が提示するプロメテウス像は、いずれも古典神話におけるプロメテウスを最高神ゼウスにも勝る高い資質と能力をもつ勝利者、すなわち英雄像の典型として描いているが、メアリの描く科学思想の落とし胤たる現代のプロメテウス（ヴィクター）は自滅的で、最終的には敗北者としてしか描かれていない。すなわち、バイロンの描くプロメテウスも、また夫パーシーの描く解放されたプロメテウスも、現代のプロメテウス像に相似形として重ねられることにより、一見輝かしい

勝利者像の背後に潜む危険性が暴き出される様子が詳述される。科学万能思想の進展や政治意識の先鋭化という問題をはらむ英雄の偶像性が破壊され、廃墟化されていくのである。これは本論文の劈頭に置かれるにふさわしい主題であり、ロマン主義文学におけるプロメテウス礼賛の風潮に一石を投ずることになる。ただ、バイロンの作品は死後出版であり、パーシーの作品はメアリの『フランケンシュタイン』の 2 年後に出版されていることには注意を払う必要がある。メアリが両作品を念頭に置くことができたのかあるいはそうでなかったのかということを曖昧にしたまま主題を展開することは、その論旨を不安定なものにしてしまうのではないかと懸念される。

メアリの英雄像批判は 3 節の歴史ロマンス『ヴァルパーガ』においてもなされるが、この作品は保守派の雑誌『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』が評価していたように、当時の保守的ディスコースの枠組みを逸脱しないものとして見られていた。しかしながら、市川氏はここに見落とされていた斬新な英雄像批判を読み取る。すなわち、物語は主人公カストルッチョの視点から直線的に進むのではなく、二人の女性を介して二項対立から三角関係へと、複雑に拮抗関係を変えていくが、二人の女性同士の結びつきによりカストルッチョとの対立が生じ、最終的にカストルッチョは物語の本筋から追放されることになる。これもまた、英雄像の廃墟化の一変奏と考えられる。

第二章

ここでは男性英雄像の批判がさらに徹底して推し進められる『最後の人間』が 3 節に分けて取り上げられるが、市川氏はここにおいてロマン主義時代そのものの終焉を告げる廃墟が出現するとの論を展開する。その際に用いられるのは、廃墟のイメージを急進主義的政治思想のイデオロギー批判とする視点である。

『最後の人間』は共和制を実現した 21 世紀のイギリスに時代背景を設定した SF 小説であるが、メアリの父ゴドウィンの政治思想とそれに共鳴したパーシーの理想的社会が疫病の蔓延により崩壊するまでを描く。これは一面で実話小説（*roman à clef*）の分類に属する作品でもあり、パーシー、バイロン、そしてメアリ自身と彼女らを取り巻く周辺人物が、作中でそれぞれの役割を演じている。物語の前半部ではパーシーやバイロンの英雄（崇拝）的側面が描かれ、後半部では英雄（崇拝）あるいは英雄的行動そのものも疫病によって終焉を迎え、廃墟を現出することになる。注目すべきは、メアリがパーシーやバイロンの政治的観点や理想主義、男性英雄主義などには与せず

に批判的に捉えているばかりか、これを危険視して批判を徹底していることである。その背景には、メアリを取り巻く夫や幼い子供たち、またバイロンなど親しい人びとが次つぎと亡くなり、彼女一人が残された深い寂寥感の中からこの作品が生み出されたという事情がある。そして、ヴァーニーとしての役割を演じてきたであろうメアリ自身も、最後の人間として廃墟に同化するという結末を迎える。廃墟に象徴的意味を見出す人間すらも存在しない、極限の廃墟表象の出現である。ただし、男性英雄主義を弾劾しているということに着目しそれを性急に強調するあまり、市川氏の論調がややもすればこの作品をパーシーやバイロンを断罪するための小説であるかのように捉えられる恐れはある。審査員の中からもこれを指摘する声があったように、この辺りにもう少し丁寧な目配りが欲しかった。

なお 2 節と 3 節の『モーリス』で扱われる「メタ廃墟」と「ティンターン修道院」を素材としたワーズワス風廃墟表象の項目は、メアリの作品に絡めてテーマとしては極めて斬新で前衛的ともいえる分野であり、なおかつ意欲的に取り組まれた論考であることは十分に理解できる。しかしながら、やや論述の正確さの点にあやうさがあり、テーマの捌き方に未消化の部分が残されたのは残念であり、これはこの先の研究課題となるであろう。メアリに影響を与えたワーズワスの自然観の中に位置づけられる廃墟のありようと、メアリ自身の進もうとする男性的ロマン主義の廃墟化とは、はたして本質的に議論がかみ合うのだろうか。たしかに、これは興味ある問題である。ワーズワスの廃墟はひたすら過去を指向する一方向のノスタルジーに連なるのではなく、失われた過去の残滓であるとともに、未来構築にいたる出発点に位置づけられる未完成の断片、という両義性をはらむのではないか。次章には「廃墟からの出発」というタイトルが付されていることからしても、市川氏にもそのことが了解されていると思われるが、この論点をしっかりと議論にかみ合わせられるのであれば、さらに秀逸な論考が期待される。

第三章

前章で英雄像や理想像を徹底的に破壊し極限の廃墟表象を現出させてしまったメアリにとって、残された仕事とはいったい何であったのだろうか。ロマン主義の男性的イデオロギーに対する批判的言語が読み取りにくいという理由から、メアリの作品世界における統一性には疑義が呈され、これまで包括的な批評はほとんどなされてこな

かった。本論が他の代表的批評と異なる点は、後期の作品の特徴もメアリの作風を論ずる上での不可欠の側面として肯定的に視野に収められ、前期の作品を論考してきたことである。本章において取り上げられる『マチルダ』『ヴァルパーガ』『パーキン・ウォーベックの運命』の三作で語られる女性像は、いわば「廃墟後」の世界にメアリが生み落とした産物として捉えられようか。新しい女性的英雄とも呼びうる者たちの中で、ある者は近親姦に翻弄され、別な者は異端と正統の垣根を超え、そしたまた別な者は戦場という女性に縁のなかった領域にまで踏み込むことになる。本論文ではここまで数多くの作品を取り上げてきたため論述がいくぶん解説に流れる嫌いもなくはないのだが、これら三作のように散発的にしか研究の対象にされることがなかった作品を掘り出して論究するためには、ある程度、それも致し方のないことであろう。

叙上の作品を市川氏は近親姦（「近親相姦」ではない）や異端、あるいは異装といった切り口から俎上で捌くのだが、その意欲と力量には見るべきものがあり、メアリ・シェリー研究に新しい領域を拓くものと考えられる。一例を『マチルダ』にとってみれば、近親姦というロマン主義文学やゴシック文学にはよく見られる主題を扱いながら、本論では明確にそれらとは一線を画している。すなわち、女性作家の見地から、メアリは娘と父親の近親姦関係において被害者の性の側に立って主人公を描き、虐げられた者に対して新しい角度から光を当てている。しかも、近親姦的情愛を抱きながらも父親は娘に対し具体的な行動を取らないばかりか、悩み、煩悶し、ついには自己破壊的行動に走る。ここには実父ウィリアム・ゴドウィンとの実生活における様々な葛藤や軋轢があきらかに影を落としていると考えられるが、同時に、このような展開は『マチルダ』独自のものであり、父親の側の複雑な心理描写は他の類似テーマを扱った作品とは明らかに異なる。

また、当時、流行した『キープセイク』などのギフトブックの作品も論究の対象とし、挿絵と作品との関連性についての指摘や、歴史の周辺に追いやられていた女性たちを『ヴァルパーガ』という歴史ロマンスと呼びうる作品において十分な活躍の場を与えたことは、とりわけ男性的英雄像の批判という主題の連続性という点からも、大いに評価される。

第四章

本章では後期の長編小説『ロドア』と『フォークナー』が取り上げられ、メアリが辿り

ついた最終的な女性像を検証する。従来はごく一部を除きほとんど閑却されてきたこれらの作品が、ひとつにまとめられた形で論じられていることはメアリ研究の新境地とも言え、とりわけ『ロドア』については批評の変遷が手際よく纏められており有益なものとなっている。

前期の『フランケンシュタイン』などの作品においては、英雄批判を明示的に描く必要があるためにかなり大掛かりな舞台設定が必要であり、かつ作品自体にはらまれる世界観も大きなものであった。しかしながら、本章の時期になると作品舞台は縮小し、男性の陰に隠れていた女性が前景化されてはいるものの、もはやそこには男性から主導権を奪おうとするような意図は見えてこず、いわゆる家庭小説の方向に収斂するかのような体裁をとることになる。廃墟すらも消滅した後の世界においては、男も女も英雄、あるいは暴君といった形で先鋭化することはもはやないのであろう。言い換えれば、『ロドア』を通してメアリは実母メアリ・ウルストンクラフトの批判をおこなっているのである。ところが、これはメアリを発掘したフェミニズム批評に対する裏切りと受け取られ可能性をはらんでおり、したがって、保守化したメアリと前半期の作品に見られた前衛的態度との統一性欠如を批判する論拠にもなる。

しかしながら、伝記的事実にかんがみれば、夫のパーシーを 1822 年に失いながら再婚を拒んできたメアリが、男性的英雄像に対置すべき女性の、社会的存在意義を擁護する主題変奏の最後に到達した形態が家庭小説であったということにほかならず、それはまた、男性ロマン派詩人たちの活動時期が過ぎ去る時期と軌跡を一にしていた事実と不可分の関係にある。すなわち、叙上の作品においては男性中心の世界が矮小化されていくのとは逆に、女性の占める領域は拡大し、女性登場人物はしっかりと存在感を確保していくことになるのである。メアリはウルストンクラフトのように女性を扇動するかのような革命的な思想はもたず、むしろ女性が社会の枠組みの中で、穏やかだが男性を凌駕するようにしっかりと足を踏みしめて生きる姿を描いている。これはメアリの日記を読んでみれば、そこに浮かび上がってくる実物のメアリ像に極めて近い生き方であることがわかる。そして、これが男性の英雄像を徹底的に批判し、破壊したあとに生まれた世界に示しうる『ロドア』の女性像エセルであったのだ。世界はメアリが憎み、批判していた状態から、より穏やかな状態に近づいているのではないか。『フォークナー』において巧妙な筋立てにより男性主人公の生殺与奪の権利を掌握しているエリザベスもまた、同断ということができよう。ここにいたる論述の流れには無理がなく、好感がもてる。

総合評価

従来のメアリ・シェリー研究では、メアリの作品に関する論考が前半期のものに集中するあまり、作家の全体像が統一的な観点から語られることが少なかった。本論において市川氏は、メアリの作品群における女性像を同時代のロマン派詩人の作品に顕現している男性的英雄主義と対比させながら、様々な変奏を経ながらもその女性像（女性観）が初期の『フランケンシュタイン』から後期の『フォークナー』に至るまで一貫していることを示そうとした。その手法の独自性は、従来のフェミニズ的批評に依拠するのではなく、むしろ、メアリの作品群に通底している社会規範に順応する因習的美徳を体現している女性たちに着眼していることにある。この視点に立脚することにより、これまで等閑視されがちであった後期の作品群も、じつは前期の作品群との連続性を保持している事実を闡明しようとした。この新しい立論の裏付けには、メアリの作品群への清新な読み込みのみならず、併せて同時代のロマン派詩人が描こうとした英雄像や当時の家庭・社会状態（規範）及びフェミニズム批評の特質とその限界（特にメアリの作品批評に当てはめた場合）などへの広範囲な目配りが必要である。市川氏は、この困難な課題に対し、大胆な作品読解を提示してその突破口を切り開こうとしたが、その試みは、力強い論調と相まっておおむね成功しているといえよう。

もっとも、作品解釈がやや強引な点や論文全体の整合性の観点から更なる緻密さが求められるべきと思われる箇所も散見される。とりわけ、廃墟表象に関わる前半部の熱のこもった議論が後半部ではいくぶん曖昧になっているという印象は拭いがたい。むろん、廃墟化の対象はおろか、廃墟自体が消滅したという論法の必然的な帰結点ではあるのだろうが、かりにそうだとしても、「廃墟」が論文全体を括る重要な措辞である以上、最終章で廃墟表象にかかわる総括をしておくべきではなかっただろうか。メアリの廃墟表象がヴィクトリア朝以降の文学にとっていかに先駆的な意味を持っていくことになるかを考えれば、なおさらのことといえよう。

瑕瑾こそあれ、原稿用紙換算で 700 枚を超える分量と、そこに盛り込まれた主題の捌き方には学問的水準の高さを窺うに十分な資質が示されている。また、当時の定期刊行物からの一次資料をも含めた膨大な資料を駆使し、必要にして十分な量の文献をよく咀嚼していたことは市川氏の学問に対する姿勢のあらわれであり、メアリとパーシー及びその周辺への行き届いた目配りや、同時代の詩人、作家の群像を浮き彫りに

した技量には並々ならぬ才能が感じられる。公開審査会における質疑に対する応答にも、しかるべき知識と誠意が感じられた。

以上のことを総合的に判断した結果、本論文は博士（学術）を授与するに値する十分な内容をもったものであるとの結論にいたったことを、ここに報告する。